



かほくがた

とりもどそう！ 河北潟
泳げる湖、おいしい魚、安心して使える水

CONTENTS

田んぼの農薬を考えるシンポジウム	1p
河北潟の仲間たち・54	
「テナガエビ」	2p

エコプロ2019に出展	3p
新潟視察(潟湖めぐり)	4p
河北潟自然再生まつり2019	6p
河北潟と山の自然をくらべてみよう	7p
そのほかニュース	8p

田んぼの農薬使用について考えるシンポジウムを開催

12月22日にシンポジウム「水田の生物多様性と農薬使用について～使わないでいい農薬を使わないことで生きものも人もhappy!～」を開催しました。遠くは新潟県や岐阜県からのご参加もいただき、全体で40名の方が会場に集まりました。

シンポジウムでは3名の講演がありました。最初に、琵琶湖博物館の大塚泰介氏から、「水田の生物群集の複雑さ」と題し、田んぼの生物多様性について、田んぼの生物の相互作用について研究事例からわかりやすい説明をいただきました。また、農薬が水田の生物群集におよぼす影響についての研究を詳しく紹介され、生物データの蓄積が重要であることと異変がみられたときに因果関係を特定していく必要があることが述べられました。グリーンピース・ジャパンの関根彩子氏からは、「食の安全とネオニコチノイド系農薬」と題し、農薬使用が誘導される社会的状況と打開方向

についてご提案いただきました。河北潟湖沼研究所からは、川原奈苗研究員が、「生きもの元気米の生きもの調査からわかったこと～市民参加型調査の成果～」と題し、農薬使用を減らす実践から見てきた可能性について報告し、調査を体験した方々からいただいた感想を伝えました。

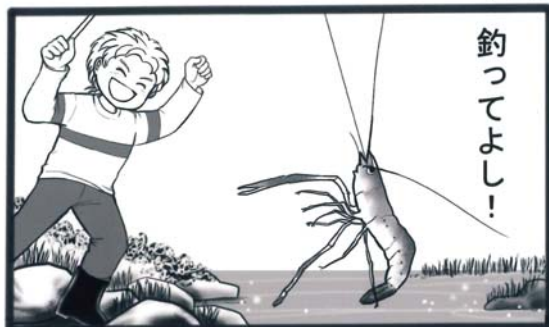
講演を受けてのパネルディスカッションでは、高橋久河北潟湖沼研究所理事長の司会により、農薬使用を減らす様々な技術が確立されてきていること、しかし農薬削減への抵抗が根強いこと、知らせること、見える化することで消費者の理解が得られることなどが話されました。会場からの意見も多く充実したシンポジウムとなりました。

本シンポジウムは、一般社団法人アクト・ビヨンド・トラスト「ネオニコチノイド系農薬に関する企画」2019年度助成を受けて実施しました。

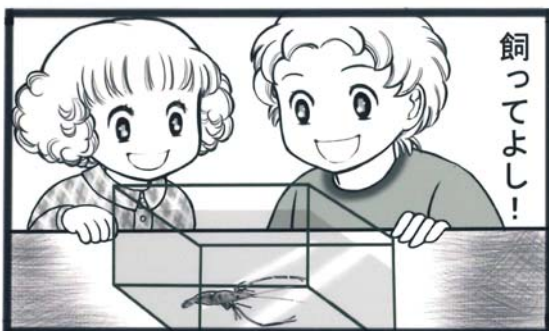
第54回 テナガエビ

カコちゃん かほくがたチルドレン

ヒロ



釣つてよし!



飼つてよし!



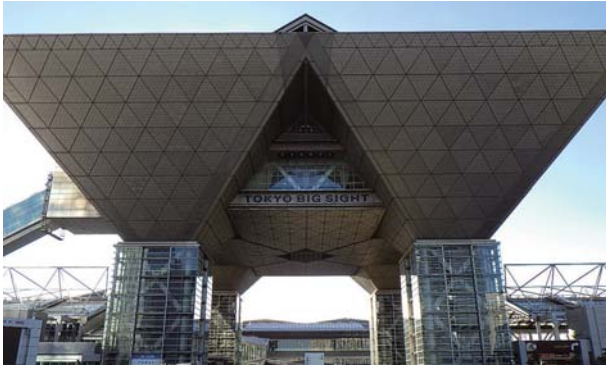
食つてよし!

お素揚げが
いいし!テナガエビ
いいよね!あっ
つてえ
?!

少やテナガエビの増加が起こっているのだと思います。長期的に見て増えていると思われるアオサギや、逆に減っていると思われるアメリカザリガニ、ここ20年くらいで相当増えたと思われるアカミミガメなど、河北潟の動物群集はダイナミックに変化しており、残念ながら安定した状態とはなっていないようです。テナガエビが増えたのも、一時的な状況かも知れません。

テナガエビは、河北潟では本来は食用とされ潟漁の対象でした。小規模な漁ですが、地元での消費だけでなく、テナガエビを県外に出荷していたり、売り歩いていたという話を聞いたことがあります。将来的には、河北潟の潟漁が復活することを願っていますが、そのためには、テナガエビを有用な水産資源と捉えて、持続的な資源確保の観点から生態系の管理を考えていく必要もあると思います。(文：高橋 久)

エコプロ2019出展報告



エコプロは、毎年行われている環境展示会イベントです。一般企業や教育機関、行政、NP0等、様々な団体の環境に関する取り組みが展示、紹介されます。2019年は東京ビッグサイトで12月5日から7日にかけて開催されました。3日間で約15万人が来場した、とても大きなイベントです。河北潟湖沼研究所は、NP0のコーナーに2013年から毎年出展し、河北潟の自然環境の魅力、生きもの元気米や七豊米等農地の保全活動や農産物のPR、その他水辺保全活動の紹介等を行っています。連続して出展しているので、毎年ブースを訪ねてきて応援の言葉をかけてくださる方もいらっやあって、ありがたい限りです。

2019年は生きもの元気米の活動を前面に出し、「田んぼの生きものおみくじ」や「田んぼの生きものクイズ」等を用いながら、河北潟流域の田んぼの環境や農薬の問題、それに対する取り組み等をPRしました。ちなみに田んぼの生きものクイズは、30センチメートル四方の田んぼの写真を用意して、「無農薬の田んぼで調査した時、30cm四方の中で何匹のユスリカがとれたでしょうか？」というもので、研究所が実際に行った調査結果に基づいたクイズです。回答はみなさんばらばら、数

十という方もいれば数千という方もいました。ちなみに答えは170匹でした。このクイズのために、初日前夜にスタッフ川原が夜中までかかって数えました。

たくさんの方が来場されるので、期間中は立ち通しで、かなり長い時間しゃべり続けることとなりますが、説明に真剣に耳を傾けてくださり、新たに河北潟や周辺農地の環境に関心を持ってくださる方もたくさんいるので、貴重な場であると思います。頑張っています。また、ふだんは出会う機会の少ない様々な地域や年代の方々とお話をさせていただくので、問題の伝え方、魅力の伝え方、他地域の活動等、学ぶこともたくさんあります。

今回、ブースの一画で干拓前からの河北潟の形の変化を展示していたのですが、昔の河北潟の形を見た何人もの方から「ミジンコみたいですね」と言われました。確かに、昔の河北潟の形はミジンコのような形です。形の移り変わりを見て、干拓という環境の変化に興味を持たれた方もいらっやいました。大勢の人と出会うので、多様な視点を感じられる面白さもありました。ブースに来ていただいた皆様、ありがとうございました。

(文：番匠 尚子)

新潟県へ視察に行ってきました。県名に「潟」が入っているので、潟がたくさんあるんだろうな、となんとなく思っていました。本当にたくさんあって「潟マップ」なるものまで存在していました。今回は佐潟、鳥屋野潟、福島潟、瓢湖を視察しました。

視察では研究所理事であり、佐潟や鳥屋野潟の研究を長くされてきた福原晴夫先生に同行、解説していただきました。またマリンピア日本海の野村卓之さんにも同行いただき、当地の生物等について説明いただきました。福島潟では「ねっとわーく福島潟」の松木保さん、「ビュー福島潟」の島吾郎さんにもお話を伺いました。

佐潟

佐潟は新潟市西区の赤塚地区にあり、上流側の小さな上潟（うわかた）と下流側の大きな下潟（したかた）の、二つの潟から成り立つ淡水湖で、ラムサール条約登録湿地です。河川流入はなく、湧水で水が供給されています。昔からヒシが多いそうで、ヨシ原も広がっています。読み方は「さがた」ではなく「さかた」だそうです。潟の横には砂丘地が見えて、そこは畑として利用され、ダイコンやスイカ、タバコ等が栽培されています。潟から砂丘を見上げると、河北潟干拓地から内灘砂丘を見上げた景色に似て見えました。

河北潟と同じように、佐潟周辺でも農業が盛んです。その影響を受けて、潟の硝酸帯窒素濃度はとても高いそうですが、これがヨシ帯を通過すると、その濃度が減少するそうです。このためヨシ原が大事にされて、ヨシ刈り等保全活動が行われています。佐潟のほとには水鳥・湿地センターがありますが、これはラムサール条約湿地となったことから、水鳥類や湿地の保全についての普及啓発、調査研究等を行う拠点施設として、開設された施設で、無料で利用できます。潟に向かって観察スペースがあり、望遠鏡も設置されていて水鳥を観察できるようになっていました。

鳥屋野潟

鳥屋野潟は町に接した場所にあり、ヨシ原が広がっていた佐潟とは違った光景が広がります。鳥屋野潟の水面はマイナス2.5メートルで、その水はポンプを使って信濃川に排水しています。すぐそばに町が広がり、住宅地に大型のスポーツ施設や公共施設等が続いていますが、鳥屋野潟流域のほとんどが海拔ゼロメートル地帯で、洪水時には鳥屋野潟が重要な「貯留施設」となっているそうです。水質や底質の悪化から1990年代に水生植物がほとんどなくなったそうです。今はアサザやヨシ等が少しあります。それでも水生植物はとて少ない状態だそうです。



福島潟

福島潟は新潟市と新発田市にまたがる大きな潟です。13本の流入河川がありますが、流出するのは2本の川だけでした。昔から洪水が多発していたため、近年になり放水路や堤防の整備がされました。ここでは江戸中期から新田開発のために干拓が始まり、周辺には水田が広がっています。周辺の田んぼでは、昔はホタルがたくさん見られたそうですが、平成10年代から急激に減少し、現在ではほとんど見られなくなったそうです。畦の除草剤の影響が大きいのではないかとのことでした。このほか福島潟では、干拓地を潟に還元しようとしている場所があること、昔、魚をとるために水上に建てた立てたヨウモツ小屋等についてもお話を伺いました。福島潟にもヨシ原が広がり、ヨシが刈り取られています、そのヨシは壁材や屋根材として需要があるそうです。野鳥等の観察施設「雁晴れ舎」は、とてもきれいなヨシ囲いがしてありました。

福島潟には「ビュー福島潟」という施設があり、ここで福島潟の環境や動植物、歴史、文化等を一通り学ぶことができます。また建物が福島潟のすぐそばにあるので、上階からは福島潟全体を見渡すことができます。高い所から見た福島潟は、とてもきれいでした。



瓢湖

阿賀野市にある人工の池です。ここもラムサール条約登録湿地です。オオハクチョウやコハクチョウがたくさん飛来する池ですが、それを目玉に観光地化されていて、周辺にはハクチョウの見える宿や食事処等があります。ハクチョウの他にもカモ類等水鳥がたくさんいました。鳥たちは人に慣れていて、餌付けされているものもいます。ハクチョウ等あまり見られない鳥からスズメ等の普段よく見かける鳥まで、ほとんどの鳥がありえないほどの近い距離で見られ、餌を持っていたら鳥に触れられるほどの距離で、とても驚きました。他にはない、独特な場所でした。

今回、短時間で複数の潟（湖）をまわったことで、潟といってもそれぞれで、人との関わり、魅力、問題等違っていることがよくわかりました。



10年目をむかえた『河北潟自然再生まつり』

2019年10月20日（日）、河北潟自然再生まつりはお天気に恵まれ、約300名の方にご来場いただきました。年に一度秋に開催する河北潟自然再生まつりは、2010年からはじまり、今年で10回目を迎えました。今回は、昔の河北潟を学びたい石川高専の学生さんの参加により、ひと昔前の河北潟の様子について地元の人たちが語りをするプログラムができました。河北潟が生活の場そのものだった時代の暮らしや文化、自然の様子は、現在の子どもたちやその親の世代にはわからなくなっています。当時の様子を地元の古老から話を伺ったり、学んだり、体験することは、河北潟自然再生まつりの大事な役割になるように思いました。



河北潟湖沼研究所ではこれまでに首都圏の公園で開催されるロハスフェスタなどに参加してきましたが、そのなかで広場でのんびり安心して過ごすことのできる空間が求められていることを知りました。自然の中で子どもが自由に走り回ることができ、色々な世代の人たちとふれあい、見聞きして学ぶことは、環境がなければ体験できないことです。河北潟自然再生まつりは、小規模な予算でボランティアを中心にしながらも、そうした場が創出されています。地元の新鮮農産物の販売やめった汁の提供も食育につながっていると思います。毎年工夫を重ね継続してきたことで、来場者も増え、公園の芝生広場でのんびり過ごす家族もみられるようになりました。食事できたりのんびり過ごせるようテントを設置しており、最近はミニテントの持ち込み可と案内しています。



農産物売り場は以前、芝生広場側に設置したこともありましたが、実行委員会で議論され、入り口付近に設営されるようになり、今年は歩く動線も考えて設営されました。昨年2018年につづいて石川高専の学生さんによるアツアツのレンコンお好み焼きが登場、農事組合法人Oneの参加で活気が増し、河北潟の農家さんの新鮮農産物を目当てに来場する方も増えました。



津幡高校の生徒会、園芸部、朱鷺サポート隊の皆さんによる、外来魚駆除釣り、アテの香り袋作り、朱鷺の折り紙づくりは親子に人気があり、高校生の丁寧で親切な対応がとても良かったです。津幡の水辺を守る会による河北潟カヌー体験は、だんだん注目を浴びています。カヌーで河北潟の自然を満喫できます。石川モンゴル親善協会による子羊の毛でマスコットづくりでは、椅子やテーブル数が足りない様子でたくさんの方が楽しまれていました。こなん水辺公園解説員による昔ながらの水でっぽうは、子どもたちに大人気♪ヨシ舟は今回水面に浮かべることはできませんでしたので、写真スポットとして展示されました。稲わらで亀や舟づくりを企画担当しましたが、喜ばれたものの製作に少し時間がかかり、低学年向けにも用意していたら良かったです。恒例のセイタカアワダチソウの高さを競う（根の長さも含む）抜き取り大会では、2019年では391cmが記録されました。セイタカアワダチソウの記録にもなっています。フィナーレでは語りの内容も盛り込まれた「かほくがたクイズ大会」がおこなわれ、盛況に終わりました。（文：川原奈苗）



河北潟と山の自然をくらべてみよう

河北潟流域ツアー 2019年11月4日 実施

流域最下流部で平野にある河北潟と、上流の山、その自然にはどのような特徴や違いがあるのでしょうか？河北潟と、水路や川でつながる山の自然を観察してくらべてみることで、また、一日で下流の河北潟と上流の水源近くを見ることで、「河北潟と上流域のつながり」をより意識していただけるようになればと考え、このツアーを企画しました。今回は吉田香蓮さんがガイドの英語通訳をしてくださり、県内在住の外国人の方も多数参加されました。



当日は、こなん水辺公園、河北潟野鳥観察舎で河北潟の自然を観察し、それから干拓地を通り抜け、河北潟東部承水路をわたり、山の石川県森林公園の自然を観察、公園内のため池（流れ出した水がやがて東部承水路に流れ込む池です）の水がわき出てくるところをさがしました。下流から上流へ移動しながら、見てまわりました。

こなん水辺公園では、ヨシやヒメガマ、チクゴスズメノヒエ等水辺の植物を観察しながら、外来植物の問題や活動について紹介しました。大宮川の河口にも行き、水鳥を観察したり「河北潟湖面利用ルール」についても紹介したりしました。上空を飛ぶハクチョウの群れも見られました。河北潟野鳥観察舎では湖面にいる沢山のカモたちを観察。ここでは河北潟と山を行き来している鳥、ミサゴの姿も見ることができました。



お昼には石川県森林公園に移動し、山の自然を観察。里山の田んぼの生きもの等についても公園の方に説明していただきました。

河北潟付近は「草」が多いですが、山へ行くと「木」が増えます。森林公園ではたくさんの種類の木やどんぐり、落ち葉の下に隠れている小さなカタツムリなどを観察したほか、農閑期で水が低くなっているため池付近では、いろいろな動物の足跡やフンなど、生きものの痕跡も観察できました。そして水の始まりを探し、斜面から水が少しずつ流れ出ているところや、地面から水がわき出ているところを観察できました。

参加いただいた方からは、河北潟と山での植生の違いがおもしろかった、湧き出した水がやがて河北潟につながることに興味深かった、といった感想をいただきました。大勢で見てまわることで、個々の発見を共有でき、発見や学びも倍になり、より楽しみながら学ぶことができます。河北潟と上流域をめぐるツアーは、今後も実施する予定です。よろしければぜひご参加ください。

＊今回のツアーは地球環境基金の助成を受けて実施いたしました。（文：番匠 尚子）

七豊米のハサ干し、脱穀

2019年の七豊米田んぼは9月21日から29日にかけて稲刈りを行い、10月3日には最初に刈り取った分を脱穀しました。その後、雨が続いて残りをなかなか脱穀できず、一か月近くたった10月23日ようやくすべてを脱穀しました。稲刈り開始時から、台風や雨が折り悪く続き、無事に収穫できるか心配でしたが、おかげさまで収穫までたどり着くことができ、おいしいお米ができました。



日本陸水学会・金沢大会に参加

2019年9月27日～29日におこなわれた日本陸水学会金沢大会で自由集会、エキスカーション、公開講演会に参加しました。自由集会では、八郎潟、霞ヶ浦、宍道湖、長良川、諫早湾の事例とともに河北潟の水質を中心した発表があり、その後、一旦閉じられた汽水域をどのように保全したら良いのかについて議論しました。エキスカーションは河北潟と周辺をバスで回るものでした。河北潟湖沼研究所は、ハッタミミズの紹介と保全等の活動について紹介しました。公開講演会では、河北潟の干拓後の変遷について高橋久理事長が発表しました。また、販売ブースの提供をいただき、河北潟レッドデータブックや生きもの元気米を販売しました。多くの方と交流でき、たくさんの応援をいただきました。

河北潟干拓地の自然観察会

10月27日10:00～13:30、グリーン・アース農地・水・環境保全組織の取り組みで、自然観察会をおこないました。基幹施設管理署では、河北潟干拓地の水管理についてもお話をうかがいました。たくさん咲いているセイタカアワダチソウの花を摘み取って、室内で花染め体験をおこないました。お昼にはすずめ野菜のめった汁と生きもの元気米おにぎりをいただきました。



河北潟ふれあいフェスタ2019

河北潟生産組合連合会が中心となってい開催される恒例イベントが11月3日に開催され、当団体も出展しました。



設立25周年・記念シンポジウム

河北潟湖沼研究所は2019年10月14日に設立より25周年を迎えました。活動に参加いただいている方々、お米や野菜などを食べて応援してくださる方々、たくさんのご支援ご協力に感謝して、11月24日に記念シンポジウムを開催しました。お昼に理事長オリジナルの「河北潟自然再生カレー」がふるまわれ、25年の活動を振り返りました。河北潟自然再生カレーは、ご飯を内灘砂丘に見立て、河北潟と日本海を模した二がけカレーで、防潮水門を模したさつまいもチップスで区切られています。「河北潟」は、干拓地で栽培されている大豆が入ったトマト味の野菜カレー、「日本海」は、河北潟と日本海を行き来するモクズガニのカニ味噌をベースにした海鮮カレー。それぞれの味を楽しんだ後は、チップスの「防潮水門」をあけて、日本海のカレーを河北潟カレーにまぜて、汽水の豊かな味を楽しむという、豊かな河北潟の自然再生への願いが込められたカレーで、これからの25年に向かって思いを新たにしました。



編集後記

河北潟自然再生まつり、最初に理事長の高橋が河北潟自然再生協議会において企画提案したときは、「自然再生まつり」の言葉にびっくり！違和感がありましたが(+_+) いまではふつうに使われています。みんなて試行錯誤しながらの10年、継続は力なりです。(N)